

# 聖書邦訳に関する一考察

西 野 和 子

I. 日本におけるキリスト教布教の歴史の中で、宣教師の果たした役割は大きい。英米諸国から、全く異なる文化背景をもって日本に渡り、さまざまな苦勞をなめた彼らは、その困難な環境にあって種々の業績を残した。なかでも聖書の邦訳はまさに大事業であった。

聖書邦訳史の諸文献によれば、明治以前にも聖書の断片的邦訳はないではなかったが、何と云っても、一般読者の使用に値するものができたのは明治に入ってからのことである。

Gützlaff のヨハネ (1854), Bettelheim のルカ (1855) などを経て Goble のひらがな和訳のマタイが明治4年、本邦最初の出版となった。相ついで S. R. Brown, Hepburn, Greene などを中心とする翻訳委員会の手になる新約各書が出た。すなわち、マルコおよびヨハネ (明5), マタイ (同6), ルカ (同8), ロマ (同9), ピレモン, ガラテヤ, ペテロ, ユダ, コロサイ, ヨハネ黙示 (同13) などがそれで、邦訳新約聖書がはじめて一冊の書物として完成したのは明治13年 (1880) である。これは一般に「委員会訳」とよばれるものだが、上記の宣教師たちの献身的な努力と、国語に熟達した日本の学者、高橋五郎、奥野昌綱、松山高吉らとの一体となった協力のたまものであった<sup>1)</sup>。この間、単独で Goble を継承し、N. Brown が明治12年<sup>2)</sup>、異色のひらがな聖書を出している。一方旧約聖書の方は、明治9年以来、東京聖書委員会を設置して、途中メンバーに変化はありながらも、新約翻訳のさい中心となった Hepburn, Brown, Greene の三宣教師は同じく中心的な存在であったようで、新約全書より7年おくれ、明治20年 (1887) に旧約全書が完成している。この場合にもやはり新約同様、高橋、奥野、松山ら数名の日本人学者が補佐に当り、旧新約聖書全体の文体、内容の統一上大いに役立ったようである<sup>3)</sup>。

以上はプロテスタント派諸氏による聖書翻訳事業のあらましかつ、それよりはるか以前に渡来したカトリック教徒によるものは意外に少ない。プロテスタントより組織力をもつとみられるカトリック教会であるが、その理由は斎藤氏の次の一節をみればうなずける<sup>4)</sup>。

「もちろん三百年前にカトリック教会がせめて聖書中の一篇だけでも訳しておいたならば、貴重なキリシタン文学となったであろうけれども、同教会は一般信者の読むべきものとして聖書に重きをおかなかったので、わずかに主の祈りなど断片的な部分が邦訳されただけである。従って日本正教会主教、I. Nicolai 訳「詩篇」(1885年) および「新約」(1900年) とカトリック教会士 E. Raguet 訳「新約聖書」(1910年) とは、プロテスタント以外の教

会訳としては、早いものである。」

なるほど聖書を唯一の聖典とするプロテスタント教会では、それだけ聖書翻訳に対する熱意が旺盛であったに違いなく、したがってその成果も大きかったと云えよう。

Ⅱ. さて本稿は、聖書邦訳について検討することを目的とするが、聖書全体を全般的に論ずることは抽象的になりがちなのでこれを避け、ある部分を対象として具体的に検討し、それを一つの手がかりとして、全般的な問題を少しでも明らかにしてみたいと思う。

まず対象をマルコによる福音書第6章30～44節までとする。この選択の理由から述べなくてはならない。

1. 新約翻訳が旧約に先だって完成した。
2. 新約の中でも四福音書が他書より早く訳出された。
3. 旧約に比して新約の方が、翻訳方法において徹底し、文体についても一貫性が高い。
4. 観察の対象としては、具体的にまとまったもの、つまりたとえ話や奇蹟などの物語風のもものが適当である。
5. 数ある物語の中で四書が共通に記録しているものは、この「五つのパンと二つの魚」の話のみである。
6. 四福音書中、この話を最も重要視しているのはマルコのようなのである。

以上の理由により上記のマルコの箇所を選ぶに至ったが、これにはもう少し説明を加える必要がある。1. と 2. については、新約全書と旧約全書との間に7年の開きがあり、四福音書がまず相ついで出たことをⅠで述べた。3. 新約の場合は、森岡氏の云われるごとく<sup>5)</sup>、「一貫して三人の委員が中心になり、三人の補佐とともに毎日（土、日を除く）会合して起草された訳文を評論採決するという方法をとった」が一方旧約の方は、「病氣、不在、他用など故障が続出して会議制で翻訳を遂行することができず、」「地方委員などを設けて分担翻訳するという方法をとった。」もちろんこの際も文体統一のため種々の努力は払われたが、今一つの箇所を窓として全体の傾向をみるためには、新訳の一部をとる方が適切と考える。

4. これは私が始めて聖書の言語を手がけるに当り、また神学の立場からでなく言語の立場から観察するという意図に基づき、聖書解釈上複雑な箇所や、抽象概念を論ずるようなところは避けるべきだと判断したからである。5. は説明の必要はないが、6. は次のような観察に基づいている。

次の表は、観察の対象とする箇所の、四福音書各々の中における量関係を示すものである。「章数」、「節数」はどの訳、どの版でも変りはないが、「頁数」は日本聖書協会発行の「縮刷小形旧新約聖書」昭和25年版、いわゆる「文語訳」のものである。「行数」は訳文により、また版の組み方によって大いに異なり得るが、ここの目的は相対的關係を明らかにすること

にあるので、四書を通じて同じ版のものでありさえすれば差支えはない。「対象箇所」の行数は、整理上、半行以上は1行に数え、以下は数えないこととした。「%」は、対象箇所の各書全体に対する比率で、コンマ以下第二位を四捨五入してある。

書 名	章 数	節数 (対象箇所)	頁数	行数 (対象箇所)	%
マ タ イ	28	1070 ( 9)	46	915 ( 8)	0.9
マ ル コ	16	678 (15)	29	573 (12)	2.1
ル カ	24	1152 ( 8)	50	984 ( 8)	0.8
ヨ ハ ネ	21	879 (14)	40	795 (11)	1.4

言語の意味機能を考える際、何にせよ、量的観察のみでその重さを測ることはできない。非常に凝縮された形で短く表現しながら質的效果を大にする、ということはしばしばある。しかし、同じ事実を告げるのにどの程度の言語量を用いるかは、著者が意識すると否とにかかわらず、その重さを表わす一つの尺度となり得ることは明らかである。ここで注目したいのは、全体が短く、表現、文体も簡潔でテンポが早いと云われるマルコ福音書においてこの物語が一番長いということである<sup>6)</sup>。書全体の長さとの比率をみると、ヨハネの1.4は比較的高いとしても、マルコの2.1にははるかに及ばず、マタイ、ルカではコンマ以下である。四書はそれぞれ異なった観点からキリストを語り、四書合せて始めてキリストの全貌が示されることは周知だが、それにしても、同じ奇蹟の事実を語るのに用いた言語量の多寡によって、著者の中におけるこの事実の重みをかなり読みとることができる。

さて量比較のあと簡単に、四福音書におけるこの物語の内容比較をしておこう。

内 容	マ タ イ 14 <sup>13~21</sup>	マ ル コ 6 <sup>30~44</sup>	ル カ 9 <sup>10~17</sup>	ヨ ハ ネ 6 <sup>1~14</sup>
イエス退き群衆従う	13	30~33	10~11	1~2
イエス群衆を見、医す	14	34	11	/
イエス、ピリポを試す	/	/	/	5~6
弟子たち人々に食を買わせるよう願う	15	35~6	12	/
イエス弟子たちに「食を与えよ」と命ず	16	37	13	/
弟子たち困惑す	17	37	13	7~9
パン5 魚2のみ	17	38	13	9
イエスの奇蹟——群衆に食を興える	18~19	39~41	16	11
凡て足りて餘り多し	20	42~43	17	12~13
食せし者5000人	21	44	14	10

ヨハネ以外、三書の内容はほぼ同じ、ただ長いものはそれだけ詳しいという程度だが、一つ

面白いのは、ヨハネの視点が違うことである。物語としての筋は同じでも著者の目のおきどころによって差がでてくる。目立つ点のみをあげると、「弟子たち」という複数形でなく、ピリポ、アンデレ個人とイエスとの対話として記されていること、および他書にはない結論が与えられていることである。すなわち14節がそれである。「人々イエスの行し奇跡を見て此ハ誠ニ世ニ臨るべき予言者なりと曰」

対象の選択理由はこのくらいにし、次に翻訳に際しての原則について考えよう。

Ⅲ. 一体翻訳という作業には、創作においては考えもつかないような特殊な困難が伴うものである。言語はその深層においては各言語共通の普遍性をもつという近年の言語学の主張もさることながら、その表層においてはおのおの著しく異なる構造上の特徴をもっている。のみならず、各言語が背負ひきずっている文化の歴史の相違によって、その意味するところも異なってくるから、単なる単語対単語の対応という関係ではすまされない複雑な性質をもってくる。一言語の単語のもつ意味を他言語の単語におき代えるというだけでは翻訳の使命は達成されず、その言語の意味も正しく伝えることはできない。J. R. Firth が云うように<sup>7)</sup>、意味とは“complex of contextual relations”としてとらえられるべきものである。語は語群の中で、語群は文の中で、文は段落全体の中で、そしてついには“context of culture”，文化の脈絡の中でとらえられなければならない、ということになる。さて実際に翻訳にたずさわる場合には、あらゆる面で完全を期することは困難であり、どこかで具体的な基準を設け、それに忠実に従うことで一貫性を保ち訳者の立場を明らかにする、ということを経ざるを得ない。新約聖書の委員会訳の際は、どんな基準によったのか。Hepburn が在日宣教師の大会で述べたという“Principles of Translation into Japanese<sup>8)</sup>”が残っている。これはかなり具体的なもので、9つの点にまとめており、重要な指摘と示唆に富むものなので、以下に引用して検討しよう。(下線筆者)

1. There should be a thorough understanding of the true meaning of the original.
2. The exact meaning of the original should be rendered without addition or subtraction, and, as much as possible, with strict adherence to the letter, to the figurative expressions, and peculiar idioms of the original.
3. To observe, as much as possible, uniformity in the use of words, namely, translating the original word uniformly by the same word; especially in important and official terms.
4. Ambiguous phrases should be rendered ambiguously. The translator has no right to interpret the meaning; though the substitution of a proper name for a personal pronoun to suit the Japanese idiom is allowable.

5. The translation should be made into the vernacular or native language, should be in a respectable and easily understood style, and in strict conformity to its grammar and idioms.
6. To choose and adhere to one form of personal pronouns; *Shu* not to be used for the second person singular when not so expressed in the text.
7. To avoid the use of honorific terms or phrases, especially the change in the voice of the verb; the only exception to this rule being in the use of *Mi* and *Tamau* in speaking of a Divine person.
8. Uniformity in the transferring of proper names, and modern and well known names, instead of the ancient and unknown names of the text; as Egypt for Mis-traim, etc.
9. To transfer the names of weights, coins, and measures, or other terms only when no equivalents are found in the native language.

以上の九原則をみると、大ざっぱにいうと原語に忠実な直訳を旨とすることによって全体の意味や文体の一貫性を重視したということのようであるが、それにしても実際の翻訳に当っては種々の困難があったものと想像される。1. はあまりにも真実であって批判の余地もないが、原語の “the true meaning” の “thorough understanding” ということ自体が実は大問題なのである。さきに述べたような、言語の意味機能の複雑さを考えた場合、一つの文化的 context の中で語られたものを異文化中の異国語におき換えようとする際、“thorough understanding” を確認する何らかの具体的、客観的方法ないしは基準を設けないかぎり、これは単なる精神的努力目標という程度に終わってしまう。2. と 4. は共通点をもっているがぐっと具体的で有益である。比喩的表現をも含めて、できる限り “strict adherence to the letter” を保てというわけで、追加も省略も許さず直訳せよというのである。 “as much as possible” とことわってあるところを見れば、もちろんできない場合もあることが前提となっていると思われるが、“adherence to the letter” が “the exact meaning of the original” を必ずしも伝えることにはならないから大変で、訳者の苦勞が目に見えてくる。4. も同様、“ambiguous” な表現はあいまいなまま訳せというのだがこれもむづかしい問題である。たしかに翻訳と解釈とは別なものであるから、訳者が自分の考えで解釈し増減することは誤りである。しかし言語によっては忠実に訳しても意味が通じないという場合も少くないので訳者は決断に苦しむこととなる。3. 6. 8. 9. は訳語の一貫性に関する原則で、混乱を防ぐために重要な注意である。ただしここにも問題はある。人称代名詞、固有名詞、尺貫の単位などはまだいいとして、より一般的な単位はしばしば意味範囲が複雑で、他言語内の相当語 (equivalent) と必ずしも一致しない。手近な例を一つあげよう。英語で “book” は単独で考

えれば大多数の人は日本語「本」を相当語とするだろう。しかし“book”と「本」の意味範囲は一部を共有しながら同時に一致しない部分をも含んでいる。少し脈絡(context)を払って“a booking office,” “The room is booked.”などと用いればそれぞれ異なる意味を持ち、日本語の「本」にはない部分をもつことがわかる。逆に「本部」、「本物」などところらも context を払えば、“book”の意味範囲にはない部分をもつことが明らかになる。というわけで「本」は「読む」，“book”は“read”という動詞との組合せにおいて、またはある形容詞とともに用いられて始めてその意味を明らかにする。つまり、ある語を他言語に訳そうとする場合、context によっては幾通りかの異なる訳語におき換えなければならないということはかなり多い。そう考えると訳語の一貫性ということも、重要なことでありながら、訳者の立場からすれば多くの問題をはらんできて、大いなる苦勞の種となつたに違いない。

7. は日本語の特殊性でもある敬語の扱いに関するもので、このような限定を与えておくことは賢明であつた。それにしても「み」と「たまう」以外にもごく日常的な動詞末尾に起こる敬語まで全廃することはできぬ相談で、“a Divine person”以外にも直接対話中などにはあちこちに見出せるから、これを原則としても実際の訳に当っては色々迷う点もあつたろうと思われる。5. は文体に関する点で大いに興味深いところである。新約の委員会訳の場合、宣教師たちが平易な文体でかなを多くすることを主張したのに対し、日本人学者たちは漢語、漢字を使いたがったことは、聖書邦訳史諸文献の伝えるところであるが、時代の風潮を超えて“vernacular”に徹することを原則とし、“easily understood style”であることを強調した点はまさに評価すべきである。学者のみを対象とせず、万人を広く対象とすべき聖書の性質を考慮すれば、何よりも平易な文体でわかりやすいということが第一である。かといって“respectable”な文体でなければならぬことも主張しているが、この点は一般の高い評価からみれば大いに成功したと云えるだろう。ただし言語の立場からすれば、文体評価の基準とは大変にむづかしいもので、主観的美観のみではどうにも解決できない。“respectable”とはいっても、その意味内容を客観的におさえ、それを訳文の中に生かすについては、まだまだ今後に残された課題は多くある。しかし今を去ること約100年もの昔、いまだ近代言語学の台頭もみぬ頃、言語構造の客観化に対する理論も方法も明らかでない時代に、すでにこれだけの原則を定め、大事業を成し遂げた諸氏に対しては、まさに敬畏の念を抱かざるを得ない。

IV. さてそれでは実際にテキストに当て観察しよう。I でみた聖書邦訳史の中から次の三つの訳を代表的なものとして選択することとし、テキストは既述のマルコ 6<sup>30-44</sup> とする<sup>9)</sup>。

A 引照新約全書	委員会訳 北英国聖書会社発行	明13 (1880)
B 我主イエズス キリストの 新約聖書	公教宣教師ラゲ訳 公教会発行	明43 (1910)

Aはすでに述べたように、はじめて一冊の書物として完成した邦訳新約聖書であると同時に、プロテスタント派諸教会のものとしても代表的なもので、その文体においても定評のあるものだからである。Bはカトリック関係の代表的な訳として、またCは再びプロテスタントによる訳で現在「口語訳」に対して一般に「文語訳」とよばれているものであるが、Aとは時代を異にしており、現代日本において長期間にわたり愛読され、1954年口語訳になってすでに20年余を経た今日でもなお各方面からなつかしまれるほどの名訳と賞賛されるものだからである。

まず三邦訳を表にして比較対照する<sup>10)</sup>。

節	番号	A 委員会訳	B ラゲ訳	C 文語訳
30	(1)	使徒等	然て使徒等	使徒たち
	(2)	イエス <small>あつま</small> は集りて	イエズ、 <small>もと</small> の許に集り、	イエスの許に集りて、
	(3)	行へる事 <small>をし</small> と教し事 <small>こと</small> とを	總ての <small>な</small> 為し、事 <small>こと</small> 、教へし事 <small>こと</small> を	その為ししこと、教へし事を
	(4)	悉く彼 <small>つづ</small> は告	告げしかば、	ことごとく告ぐ。
31	(5)	イエス <small>かれら</small> 彼等 <small>むか</small> は日けるハ	イエズ、 <small>かれら</small> 彼等 <small>むか</small> に向ひ、…と曰	イエス言ひ給ふ
			へり	
	(6)	爾曹 <small>ひと</small> 衆 <small>さけ</small> を避て	別に	「なんぢら人 <small>ひと</small> を避 <small>さ</small> け、
	(7)	我 <small>とも</small> と偕 <small>しば</small> は暫 <small>さび</small> く寂寞 <small>さび</small> とある <small>き</small> ハ	寂しき處 <small>ところ</small> に來りて	寂しき處 <small>ところ</small> に、いざ來りて
		往て休 <small>やす</small> むべし	暫し休め、	暫し息へ」
	(8)	是往來 <small>ゆき</small> れもれ多 <small>おほく</small> して、	其は往來 <small>そ</small> する人 <small>ひと</small> 多くして、	これは往來 <small>ゆき</small> の人 <small>ひと</small> おほくして、
	(9)	食 <small>しょく</small> する暇 <small>ひま</small> も無 <small>な</small> きし故 <small>ゆゑ</small> なり	食する暇 <small>いとま</small> だにあらざればなり。	食する暇 <small>ひま</small> だになかりし故 <small>ゆゑ</small> なり。
32	(10)	あきら人 <small>さけ</small> を避舟 <small>ゆか</small> よて	斯て船 <small>ね</small> に乘りて、別に	斯て人 <small>ひと</small> を避 <small>さ</small> け、舟 <small>ふね</small> にて
	(11)	寂寞 <small>さび</small> とある <small>ゆけ</small> ハ往り	寂しき處 <small>ところ</small> に往り。	寂しき處 <small>ところ</small> にゆく。
	(12)	其往 <small>ゆく</small> を見て	彼等 <small>かれら</small> の往 <small>ゆく</small> を見て、	其の往 <small>そ</small> くを見て、
	(13)	衆人 <small>ひと</small> おほくイエス <small>おほ</small> をあり	多くの人 <small>ひと</small> 之 <small>これ</small> を知り、	多くの人 <small>ひと</small> それと知り、
	(14)	諸邑 <small>むら</small> より徒行 <small>か</small> よて趨 <small>はし</small> り	凡ての町 <small>まち</small> より徒歩 <small>か</small> にて…馳集 <small>はせあつ</small>	町々 <small>まちまち</small> より徒歩 <small>か</small> にてともに走
			りしが、	り
	(15)	彼等 <small>かれら</small> の往んとする所へ	彼處 <small>かしこ</small> に	その處を指して
	(16)	先ち往てイエス <small>あつま</small> は集まり	彼等 <small>かれら</small> に先ちて、	彼等 <small>かれら</small> よりも先に往り。
34	(17)	イエス <small>いで</small> 出て	イエズ、 <small>い</small> 出でて	イエス出でて、
	(18)	多 <small>おほく</small> れ人 <small>み</small> を見よ	群衆 <small>ぐんしゆう</small> の影 <small>おびた</small> しきを見給ひ、	大なる群衆 <small>おほい</small> を見、
	(19)	彼等 <small>かふもの</small> ハ牧者 <small>ひつじ</small> なき羊 <small>こと</small> れ如き者	其牧者 <small>そのほくしや</small> なき羊 <small>ひつじ</small> の如く	その牧者 <small>か</small> なき羊 <small>もの</small> の如く

		あるより 困て之を 憫み あはれ	なるを 憫み、 あはれ	なるを 甚く 憫みて、 いた あはれ
	(20)	許多れ事を教へはじめぬ さまざま ことをし	多くの事を教へ始め給へり。 おほ ことをし はじ たま	多くの事を教へはじめ給ふ。 おほ ことをし はじ たま
35	(21)	時すでに暮景よりけきバ とき くれがた	日既に暮れかゝりしかば、 ひ すで く	時すでに晩くなりたれば、 とき すで おそ
	(22)	其弟子のきよ來ひけるハ きたり	弟子等近づきて云ひけるは、 でしたち ちか い	弟子たち御許に來りていふ で し みもと きた
	(23)	此ハ寂寞と云ふして ここ さび さま	處は寂しく ところ さび	「ここは寂しき處、 ここ さび ところ
	(24)	時も既に晩し とき すで おそ	時は既に晩し。 とき すで おそ	はや時も晩し。 とき すで おそ
36	(25)	衆人れ食ふべき物かきが故よ ひと くら もの けが		
	(26)	其自ら みづか	面々に めんめん	己がために おの
	(27)	四周れ郷村より往て あたり むらごと ゆき	四邊の田家及邑に往きて あたり ゐなかやおよむら ゆ	周圍の里または村に往きて、 まはり さと ゐら ゆ
	(28)	パンを市んが爲よ もとめ	食物を買ふことを得しめ給へと。 しょくもつ か へ	食物を買はせ給へ」 しょくもつ か
	(29)	彼等を去しめ給へ かれら さら たま	人々を還し、 ひと へ	人を去らしめ(「」の中) ひと さ
37	(30)	イエス答けるハ こたへ	イエズ、答へて、 こた	答へて云ひ給ふ こた い たま
	(31)	爾曹のきよ食を與よ なんぢら しょく あたへ	汝等是に食物を與へよ、と曰ひしかば、 なんぢらこれ しょくもつ あた のたま	「なんぢら食物を與へよ」 なんぢら しょくもつ
	(32)	弟子のきよ曰けるハ で ま いひ	彼等云ひけるは かれら い	弟子たち言ふ で し い
	(33)	我儕ゆきて われら ゆ	彼等往きて われら ゆ	「われら往きて われら ゆ
	(34)	銀二百のパンを市 ぎん にかひ	二百デナリオにて麴を沽ひ、 にひやく ばん か	二百デナリのパンを買ひ にひやく か
	(35)	のきらよ與て食しむ可る あたへ くらは べき	彼等に食せしめんか、と。 かれら しょく	これに與へて食はすべきか」 あたへ く
38	(36)	イエス彼等より曰けるは かれら いひ	イエズ、…と曰ひしに のたま	イエス言ひ給ふ いひ たま
	(37)	パンハ幾何ある いくつ	汝等幾個の麴をか有てる、 なんぢら いくつ ばん も	「パン幾つあるか、 いくつ
	(38)	往て視よ ゆき み	往きて見よ、 ゆき み	往きて見よ」 ゆき み
	(39)	彼等みて其數をしり かれら 数 かぞ	彼等尋ね知りて かれら たづ し	彼ら見て かれら み
	(40)	五れパンと二の魚ありと答ふ いつつ ふたつ うを こた	五個と二尾の魚とあり、と云へり。 いつつ ふたつ さかな	いう「五つ、また魚二つあり」 いつつ うをふた
39	(41)	イエス衆れ人を組々として すべて ひと ぐみ	斯て…人々を…組々に かく ひと ぐみ	イエス凡ての人の組々となりて、 すべて ひと ぐみ
	(42)	青草れ上より坐しめよと命じけきバ あをくさ うへ すわら めい	命じて…皆青草の上に坐せしめ給ひ、 めい みなあをくさ うへ ざ	青草の上に坐することを命じ給へば、 あをくさ うへ ざ めい
40	(43)	或ハ百人或ハ五十人づゝ あるひ ひやくにん ごとふにん	人々百人五十人づゝ ひと へん にん にん	或は百人、あるひは五十人、 あるひ ひやくにん ごとふにん
	(44)	列坐せり らびざ	坐したるに、 ざ	畝のごとく列びて坐す。 うね ざ
41	(45)	イエス かく	イエズ、 かく	斯てイエス かく
	(46)	あれ五のパンと二れ魚をとり いつつ ばん ふたつ さかな と	五個の麴と二尾の魚とを取り、 いつつ ばん ふたつ さかな と	五つのパンと二つの魚とを取り、 いつつ ばん ふたつ うを と
	(47)	天を仰ぎ謝して てん あふ しろ	天を仰ぎて祝し、 てん あふ しゆく	天を仰ぎて祝し てん あふ しゆく



	(48)	パンをとり弟子 <small>あたへ</small> と與へ	麴 <small>ばん</small> を擣 <small>き</small> きて弟子等 <small>でしたち</small> に與 <small>あた</small> へ	パンをさき、弟子たち <small>でし</small> に付 <small>わた</small> して
	(49)	人々 <small>まへ</small> れ前 <small>おか</small> と陳しむ	之 <small>くれ</small> を人々 <small>ひとへ</small> の前 <small>まへ</small> に置かしめ、	人々 <small>ひとへ</small> の前 <small>まへ</small> に置かしめ、
	(50)	又二 <small>うを</small> れ魚を	又二尾 <small>またふたつ</small> の魚 <small>さかな</small> を	ふた <small>ふた</small> つの魚 <small>うお</small> をも
	(51)	人毎 <small>ひとごと</small> と分 <small>わけ</small> 與 <small>あた</small> ぬ	一同 <small>どう</small> に分 <small>わか</small> ち給 <small>たま</small> ひしかば、	人毎 <small>ひとごと</small> に分 <small>わか</small> ち給 <small>たま</small> ふ。
42	(52)	衆人 <small>ひとへ</small> みお食 <small>くらひ</small> て飽 <small>あき</small>	皆食 <small>みなしよく</small> して飽 <small>あきた</small> 足れり。	凡て <small>すべ</small> の人食 <small>ひとくら</small> ひて飽 <small>あ</small> きたれば、
43	(53)	それパン <small>うを</small> と魚 <small>くづ</small> れ餘屑 <small>ひろひ</small> を拾し よ	残 <small>のこ</small> れる屑 <small>くづ</small> を拾 <small>ひろ</small> ひしに魚 <small>さかな</small> を併 <small>あは</small> せて、	パンの餘 <small>あまり</small> 、魚 <small>うを</small> の残 <small>のこ</small> を集 <small>あつ</small> めしに、
	(54)	十二 <small>かご</small> れ筐 <small>みち</small> と盈 <small>み</small> ちたり	十二の筐 <small>かご</small> に満 <small>み</small> ちしが、	十二の筐 <small>かご</small> に満 <small>み</small> ちたり。
44	(55)	パンを食 <small>くらひ</small> たる男 <small>をとこ</small> およそ五千人 かりき	食 <small>しよく</small> せし男子 <small>だんし</small> は五千人 <small>にん</small> なりき。	パンを食 <small>くら</small> ひたる男 <small>をとこ</small> は五千人 <small>ごせん</small> なりき。

以上の対照表自体が多くを語っているが、三者の比較の中にそれぞれの背景となっている時代の反映をみることができる。いくつかの点に絞って観察を進めよう。N. Brown のひらがな訳、口語訳および英語訳 Authorised King James Version (A. V.) を必要に応じて参照することとする。どの邦訳もギリシャ語から直接訳されたことを聖書邦訳史文献は告げているが、同時に、すでに1611年に完成し、高い評価を受けてきた A. V. の影響を免れてはいないと思われるふしが多々あることも事実である。

1. 句読点の問題
2. 表記の問題
3. 訳語の問題
4. 文構造の問題
5. 文体の問題

1. 読んでまず目につくのは句読点の差で、B、Cでは用いているのにAでは全く用いていないという点である。これだけでも読む者に対する視覚効果はずい分異なる。時代背景の差を物語るとも云えるが、私が集めた反応によれば、現代人の目には、句読点のない方が優雅な感を与えるようである。ただしAよりも一年先に出版された Nathan Brown 訳のひらがな聖書には句読点が付してある。B、Cでは大体のところは一致しており、たまに異なる点はあるが(例：(7), (10), (12), (17) etc.) そのために意味が大きく変るという程の事はない。

2. 表記の問題についてはまずかなと漢字に分けて考えよう。A、B、Cとも固有名詞は「かたかな」で、A、Bでは人名には一本、地名には二本の傍線を施して区別しており、Cでは傍線を一切省いている。比較の参考までに N. Brown の訳をみるとこの方は全部ひらがなで、その中の多数の右側に横書きでローマ字を添えている。この個所では固有名詞は「イエス」のみだが、A、Cでは「イエス」、Bでは「イエズ、」となっており、これ以外

の個所に出てくる固有名詞は、人名、地名ともかなり相違している。これはプロテスタントとカトリックの習慣の差の故と解されるが、音韻論上、非常に興味深い問題であり、また現在すすめられている超教派の共同訳などでは、固有名詞の訳語統一だけでも大きな仕事となるはずである。借入語の問題同様、原語の音および音連続が、構造の異なる日本語の音韻体系の中にどのような形でめこまれてゆくかを決定する際には、音韻理論をその基礎にもたなければ一貫性を保つことはむづかしいからである。借入語の場合は、文化間の接触により、聞えたままを意識せずに日本語中の類似音に置き代えるというプロセスをとり、したがって一貫性を要求するいとまもないが、翻訳の場合は少し事情を異にする。つまり、訳者が意識的に決定するため当然一貫性がもとめられるわけで、それには両言語の音韻体系の仕組みをわきまえ比較した上でなければうまくいかない。

さてテキストに戻ると、固有名詞以外のかなは全部「ひらがな」で、そのうちAでは「変体がな」を多く用いている。すなわち、にーふ、はーハ又はゑ、こーふ、のーれ、すーそ、りーぞ、れーき、はー得、しーち、なーか、みーミ、いーぬ、そー巻、わーじ（テキスト出来順）といった具合であるが、その用法には必ずしも一貫性があるわけではなく、これはここ以外の個所においても同様である。

漢字についてはどうかというと、これも三訳それぞれかなり異なっていて面白い。さらに資料を広げて現代の口語訳をも考慮に入れると、今日ならばもう使わないような漢字が多くみられる。總てー<sup>すべ</sup>B(3)、為すー<sup>な</sup>B・C(3)、爾曹ー<sup>なんじら</sup>A(6)、衆ー<sup>ひとぐ</sup>A(6)、寂莫ー<sup>さびしき</sup>A(7)、諸邑ー<sup>むらむら</sup>A(14)、趨りー<sup>はし</sup>A(14)、徒行ー<sup>かち</sup>A(14)、徒歩ー<sup>かち</sup>B・C(14)、彼處ー<sup>かしこ</sup>B(15)、處ー<sup>ところ</sup>C(15)、先ちー<sup>さきだ</sup>A・B(16)、牧者ー<sup>もの</sup>A(19)、許多ー<sup>さまざま</sup>A(20)、暮景ー<sup>くれがた</sup>A(21)、晩く(し)ー<sup>おそ</sup>C(21)、C(24)、鄉村ー<sup>むらざと</sup>A(27)、田家ー<sup>ゐなかや</sup>B(27)、市んー<sup>もとめ</sup>A(28)、市ー<sup>かひ</sup>A(34)、我儕ー<sup>われら</sup>A(33)、幾何ー<sup>いくつ</sup>A(37)、衆ー<sup>すべて</sup>A(42)、列びー<sup>なら</sup>A・C(44)、麪ー<sup>ばん</sup>B(46, 48)、筐ー<sup>かご</sup>A・B・C(54)、盈たりー<sup>みち</sup>A(54)など、目だつものだけでも枚挙にいとまがない。そしてこれら大多数の漢字には、A・B・Cとも「ひらがな」でルビがうってある。この際もAでは変体が多くなり、しかも必ずしも一貫性はない。漢字に付随してもう一つふれるべきことがある。それは動詞の送りかな用法の差である。戦後国語政策の送りかな改革のゆえに、口語訳となるとさらに差は大きくなるが、この三邦訳で目立つのは、AとB・Cとの違いである。少し例をあげよう。教しA(3)→教へしB・C(3)、告A(4)→告げしかばB(4)・C(4)、日けるはA(5)→日へりB(5)、多してA(8)→多くしてB(8)、避A(10)→避けC(10)、往りA(11)→往けりB(11)、見にA(18)→見給いB(18)、去しめA(29)→去らしめC(29)、答けるはA(30)→答へてB・C(30)、與よA(31)→與へよB・C(31)、食しむA(35)→食はすC(35)、食て飽A(52)→食ひて飽きC(52)、拾しにA(53)→拾ひしにB(53)。以上概観すると、送りかな表記については、AとCが基本的に異なりBは概してC寄りだが多少A寄りの点もある、ということである。つまりCでは動詞の種類(四段、上一段、下一段など)を送りかなに明らかにすることで一貫しているのに対し、

Aではいわゆる助詞だけを送り、動詞の語尾は漢字の中に含めることを原則としているようである。ただしそうっていない例も多少あり、憫み(49)、謝して(47)などはその一例である。さて上述の、BのA寄りの点というのは、複合動詞の場合にみられる。たとえば、「馳集りしが」(44)、「飽足れり」(48)はC方式であればそれぞれ「馳せ集り」、「飽き足れり」となるはずである。ものを論ずる折にはいつの場合にも、何を基準とするかによって評価は変わってくるものだが、以上のように見てくると、表記法に関しては、やはり歴史の積み重ねを反映してCがもっとも一貫性を高く保っているようである。

3. 訳語選択の問題は一般に翻訳を考える際、常に重要なことである。原語の単語に対して受け入れ側の言語中、どの単語を相当語とするかは慎重を期さねばならぬ。既述のごとく、言語によって単語の意義素は異なり、一部を共有しながらも意味範囲は必ずといってよい程ずれをもつからである。しかし福音書中の物語では、この点における問題はそう多くない。これはIIで述べたように、直訳を旨とし訳語の統一に努力した結果でもあろうし、又新しい訳者たちは前訳者たちの功績を意図的に生かそうとした故でもあろうと思われる。たとえ意味が異ならなくても、多くの人を読みなれたものを大幅に変えることは混乱の因となるので、この一貫性は尊重すべきである。この個所でとくに目立つのは、B(40)の「別に」という表現くらいである。これはA, Cの句、「人を避(け)」に当る。品詞としては両方とも副詞機能をもつと思われるが、形も音も異なるために、意味は共有部分をもつとしても全体としてかなり違った感じを伝える。参考までにA. V. をみると、(6)では“*apart*”，(40)では“*privately*”に当たるものである。あとは(48)でA, B, C それぞれが、A. <sup>みづか</sup>自ら、B. <sup>めんめん</sup>面々に、C. <sup>おの</sup>己がために、と異なる表現を用いている点が目をひくが、これはA. V. の“*themselves*”に当たり、いずれも意味上の問題はなかろう。

4. 文構造の問題は単なる訳語の問題よりもはるかに複雑なのが常である。重点的に観察してみよう。

a. 33節後半(44)～(46)の文構造に三者のずれがある。対照表では句単位で相当する部分を同番号の下に並べたが、*syntactic order* に問題がありしたがって文構造が異なってくる。訳文全体は次のごとくである。

A. 諸邑より徒行にて趨り彼等の往んとする所へ先ち往てイエスに集れり

B. 凡ての町より徒歩にて彼等に先ちて、彼處に馳集りしが、

C. その處を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。

A. V. And ran afoot thither out of all cities, and outwent them, and came together unto him.

A, C, A. V. はそれぞれ文を完結しているがBは「が」で連結させ、34節と併せて一文としている。また、A. V. で、“*ran*”にかかる副詞機能をもつ“*thither*”の相当部がAでは「先

ち往て」(“outwent”)にかかっているのに対し、Cでは前に出して「走り」にかけA.V.と一致している。Cはややおもむきを異にして“ran”と“come together”を一つの複合動詞「馳集りし」とまとめて、それに「彼處に」をかけている。Cの「ともに走り」の「ともに」はA.V.の“together”に比して“came”でなく“ran”にかけた点で構造を異にするし、“outwent”を最後の動詞として、あとの部分は訳文に現れていない。

b. 36節(25)~(29)をみよう。

A. 衆人の食ふべき物なきが故に其自ら四周の郷村に往てパンを市んが為に彼等を去しめ給へ

B. 人々を選し、四邊の田家及邑に往きて面々に食物を買ふことを得しめ給へ、と。

C. 人々を去らしめ、周囲の里また村に往きて、己がために食物を買はせ給へ」

A.V. Send them away, that they may go into the country round about, and into the villages, and buy themselves bread: for they have nothing to eat.

弟子たちの言葉は35節から続いているが、文としてはA, B, C, A.V.ともこの節だけで一つの命令文を形成しており、AおよびA.V.は「去」“send”を主動詞とする複文で一致、(26)~(28)と(25)の部分がそれぞれ従属節をなしている。ただしAでは目的を表わす節として、A.V.では結果を表わすものと解釈できる。これに対し、B, Cでは、(25)の部分を欠き、(27), (28), (29)に含まれる三動詞をもつ重文の形をとっており、前項3で触れた語句の差とは別に文構造をも異にしている。

c. 39節(41)~(42)も Syntactic level での差を示している。

A. イエス衆の人を組々にして青草の上に坐しめよと命じければ

B. 斯て命じて、人々を皆青草の上に組々に坐せしめ給ひ、

C. イエス凡ての人々の組々となりて、青草の上に坐することを命じ給へば、

A.V. And he commanded them to make all sit down by companies upon the green grass.

この場合もbの場合と同様、AとA.V.は、Aが節であるのに対し、A.V.は文として完結している点以外は一致しており、B, Cはそれぞれ少しづつ異なっている。すなわちB, CともA同様、次の40節に続く従属節となっているが、Bは、「命じる」、「坐せしむ」という二動詞を含む命令を意味する重文的構造をもつものに対し、Cでは、「組々となる」、「坐する」の二動詞を含む名詞節が「命じる」の目的語として機能している。意味の面では、AとA.V.が、「イエスが弟子たちに命じ、弟子たちが人々に命じる」プロセスが明らかにしているのに対し、B, Cでは、イエスが直接人々に命じたことになっており、文構造の差が伝える意味にずれを生ぜしめることがみられる。

以上、目立つところ三点についてそれぞれ比較したが、他にこまかい差異は多数ある。全

一般的に一貫して云えることは、A、Bが間接話法を用いているのに対し、Cは「」を明記して直接話法に切りかえている点である。A. V. では“ ”は用いず、しかし話の始を大文字にして構造上は直接話法をとっている<sup>12)</sup>。

5. 文について論じるのに文体に触れることなく通り抜けることはできない。しかし、文体の問題は常に複雑を極めるものである。というのは、以上1～4にみたことはすべて、文体の問題に含まれるからである。そればかりでなく、およそ言語に関するすべての特徴——細かくは一つ一つの音、音連続から広くはそのものの全体の構造まで——が含まれ、文の長短、表記の方法、リズムなどすべてが関連しているわけで、視覚効果、聴覚効果ともに観察対象となるわけである。文体を論じる書物は古くから多々あるけれども、そもそもの本質そのものを客観的に述べることは非常にむづかしい。参考までに文体の定義をS. O. D. に求め、適当と思われる部分のみを引用しよう。

“manner of writing (hence also of speaking). …a writer’s mode of expression considered in regard to clearness, effectiveness, beauty and the like.”

たしかにその通りではあるけれども、いざ文体評価の段階になると、価値観は主観に流れやすい。Spencer と Gregory は次のように心中を吐露している<sup>13)</sup>。“Style in literature is a recognizable but elusive phenomenon. … it is multifariously defined, yet evade precision. …The same problem [the difficulty of precise definition] arises with many of the abstract, generalized concepts without which neither humanist nor scientist could proceed far in the task of analysis, comparison and validation of hypotheses. This is especially so where phenomena cannot easily be quantified, mathematically precise definitions are unlikely to be forthcoming. So it is, to a high degree, with style.”(下線筆者)

というわけで、文体の分析および評価は至難の業である。今までに、一方では literary criticism の一端として、又他方では言語学的に記述の対象として研究はなされてきた。前者では客観的基準がたてにくく、後者では文体特徴(stylistic features)<sup>14)</sup>を抽出記述してもその統合(totality)としての文体を評するにはやはり主観と客観の間を往き来せねばならぬ結果となり、“cannot easily quantified”であるだけに、“evades precision”の難を免れにくい。

さてそれでは現実に邦訳聖書の文体評価はどうであろう。森岡氏は委員会訳旧新両訳聖書を比較して次のように云われるが、これは大体の定説とみてよからう<sup>15)</sup>。

「新旧両訳聖書の和訳は、訳文としての正しさと日本語としての美しさを兼備し、新しい文体を創造している点で、ともに明治翻訳文学の最高峰とみなされるが、もし両者を比較するとすれば、全体としては旧約聖書の方がさらに高く評価されるであろう。明治一三年に完了した新約聖書の翻訳は不毛の地に華麗な道を切り開いた画期的な偉業であったとしても、

日本語としてやや生硬の感を免れなかったのに対し、明治二〇年に完成した旧約聖書の翻訳は、日本語としての洗練度も高く、明治文学へ与えた影響はことさら大きいからである。」

他にも「優雅な美しい文体」とか「雅致ある文体」とか評せられることがしばしばであり、それは大いにうなずけるが、やはりその価値観の基をなすものは依然“elusive”であり、これは文体論に必然的につきまとう難関なのかも知れぬ。

さて本稿では、ただ一つの奇蹟の物語に対象を絞り、色々な角度からの比較観察を試みたが、全般的な文体については決定的な差異は見出せず、伝えるべきメッセージも明白である。具体的事実に基いた物語であり、韻文体でないことにも起因すると思われる。1～4にみた諸事実をふまえた上で総合的にみると、大ざっぱにいうとAとCが傾向をともにし、Bが多少異なっているようであるが、これは既述の、語い、文構造などとも関わりがあろう。視覚的には、表記の問題の所で述べたように、それぞれ少しずつ異なるけれども、聴覚的にはとくにA、Cは類似しており、CがAに対する改訳というわけで、前訳を尊重してなされたことが読みとれる。リズムの点からいうと、Cの方が全体に優れており、長文を避け、平明な文にしようとする努力がうかがわれる。Bには独自の努力と苦心がうかがわれるが、リズムの点ではやや劣ると思う。多数の人々の心の糧として日々親しむことを期待するものであることを考えれば、音読であれ目読であれ、文の流れ、リズムは非常に重要で、どんなに留意してもしすぎるということはない。その点でも現在の口語訳は一考の要ありと思われる。

V. 以上、聖書翻訳という大問題の一端を探ろうとして諸観察を試みた。前半では邦訳聖書の成立過程と翻訳の方法を論じ、後半ではマルコ福音書6章の一部に焦点を絞り、種々のレベルで訳文を検討した。小さい一つの窓を通して全体をくまなくおし測ることはできないが、具体的検討の中に、いまだ翻訳に関する言語学的理論も技術も皆無に等しい時代にあって払われた努力と苦心の程をうかがうには充分であった。ただ惜しまれたのは、翻訳に際しての訳者たちの具体的な苦勞についての記録が諸文献の中に見出せなかったことである。「直訳を旨とする」と云っても二言語の構造が根本的に違う以上、実際にはそうはいかない部分が多くあったはずである。どの単語について、どの部分について、どのような討論がなされた上で訳語、訳文が決ったかについての具体的討論にふれられれば、本稿の検討はより立体的になり得たであろう。さきに述べた文体論の問題とともに今後も探り続けたいと思う。

#### 注

1. 豊田氏の引用される、井深梶之助氏の談話に、翻訳者たちの当時の方法と苦心の様をうかがうことができる。

「翻訳委員は、日曜日土曜日の外は、毎日午前九時から十二時まで会合して、委員の一人が先に起草した所の翻訳に就て、評論採決した。或時は半日懸って漸く省略、式節を決定した事も稀ではなかった様である。……室の中央に一脚の丸テーブルがあって、その周囲に三人の翻訳者と、

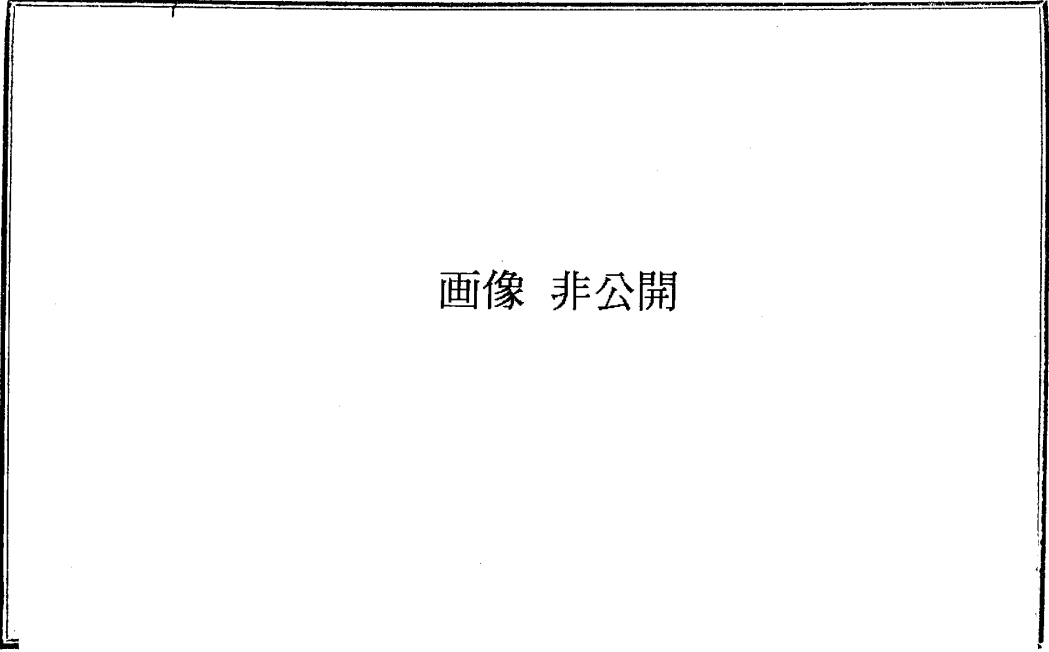
三人の補佐役とが夫々着席して、討論したのであるが、そのテーブルの上に開いてある書物は、ブラオン氏とグリーン氏の前には、二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英語訳の新約註解書、日本人の前には文法や官話やその他の支那翻訳の聖書という風であった様に記憶する。…」  
『日本英学史の研究』p.511.

2. 豊田: Ibid., p. 512. 私が入手できたものは明治18年の版で、それを参考としている。
3. この辺のいきさは森岡氏の「旧約聖書の訳語」『東京女子大創立50周年記念論文集日本文学編』に詳述してある。
4. 斎藤: 「邦訳聖書の文体」日本学士院紀要第25巻第1号 p. 51.
5. 森岡: 「旧約聖書の訳語」pp. 117, 161.
6. Nida の次の一文はその一例である。“... the fast-moving, brisk style of Mark is quite different from the much more polished and structured style of Luke.” (下線筆者) *The Theory and Practice of Translation*, p. 13.
7. “Meaning, that is to say, is to be regarded as a complex of contextual relations, and phonetics, grammar, lexicography, and semantics each handles its own components of the complex in its appropriate context.”  
“It [his analysis of meaning] can be described as a serial contextualization of our facts, context within context, each one being a function, an organ of the big context and all contexts finding a place in what may be called the context of culture.” Firth: “Technique of Semantics,” *Papers in Linguistics*, pp. 19, 32.
8. Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan Held at Osaka, 1883, pp. 410~20, これは1883年4月16日から21日まで6日間にわたって開かれた大会の第5日目、20日午後に行われたもので、この講演のあと非常に興味深いディスカッションが記録されている。後に、1900年、東京で行われた同じ会の Proceedings にも、時を経て後なおこの方針はあちこちにうかがわれる。しかしこの Hepburn の「直訳方針」も実際は多くの困難に直面することは必然で、訳語の一貫性 (verbal consistency) よりも脈絡の一貫性 (contextual consistency) を主張する次の説と比較すると問題は多い。  
“Since words cover areas of meaning and are not mere points of meaning, and since in different languages the semantic area of corresponding words are not identical, it is inevitable that the choice of the right word in the receptor language to translate a word in the source-language text depends more on the context than upon a fixed system of verbal consistency, i.e., always translating one word in the source language by a corresponding word in the receptor language.” Nida: Ibid., p. 15.
9. 主な対象とした三邦訳テキストは本稿のあとに添付。
10. 比較しやすいように、テキストを55部分に分け、通し番号をふった。構文の異なる部分は必要に応じて順を入れかえ、後の検討のところで説明した、
11. 動詞「曰ふ」はCでは「云ふ」となっており、さらに口語訳では送りがなが変化して「云う」となっている。③も同様。
12. RSV, NEB, TEV は直接話法となっている。
13. Spencer & Gregory: An Approach to the Study of Style, *Linguistics and Style*, p. 59.
14. “...good style consists primarily in a proper combination of factors designed for efficiency and for special effects.” Nida: Ibid., p. 150. Nida は stylistic features を検討するに当り、上記の二軸、efficiency と special effects に分け、その各々を formal features (全体の構造、文の長短、つなぎ具合、文構造などの形式的特徴) と lexical features (単語レベルでの諸特徴) とに分けている。示唆にとむ方法だが、実際には、二軸で相矛盾する場合も続出し、やはり困難は

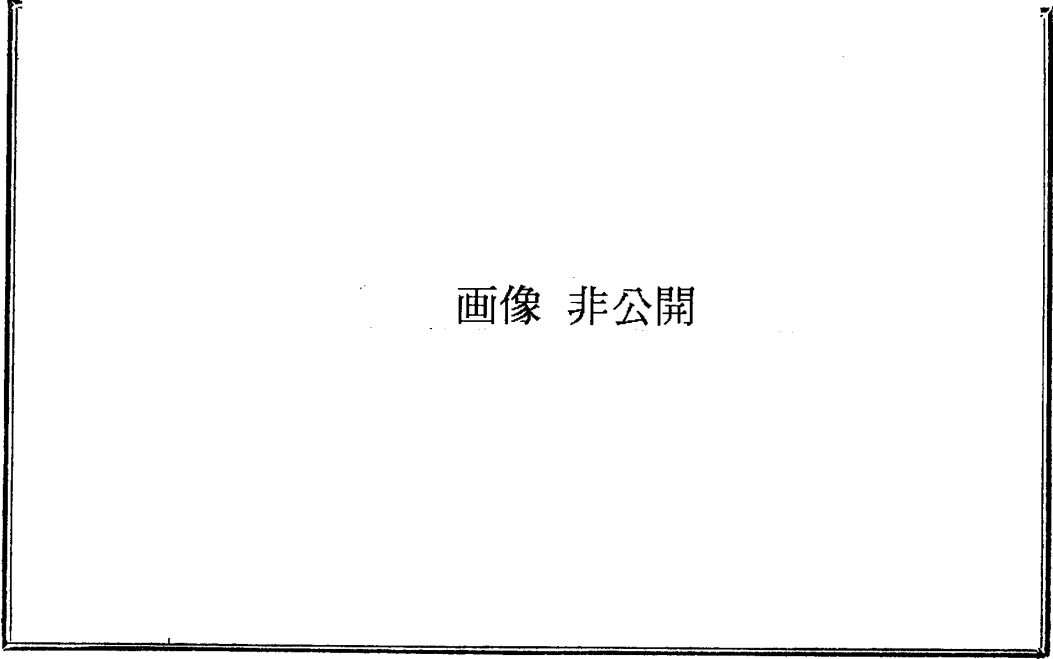
つきまとう。

15. 森岡：『近代語の成立』 pp. 226～227.

□ A. 委 員 会 訳



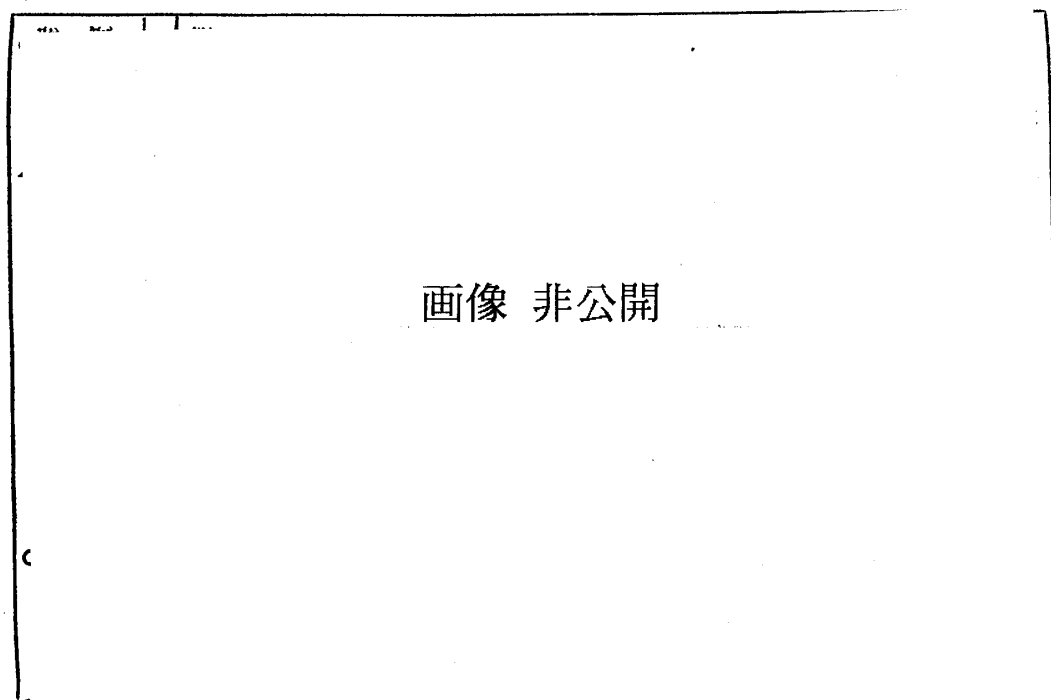
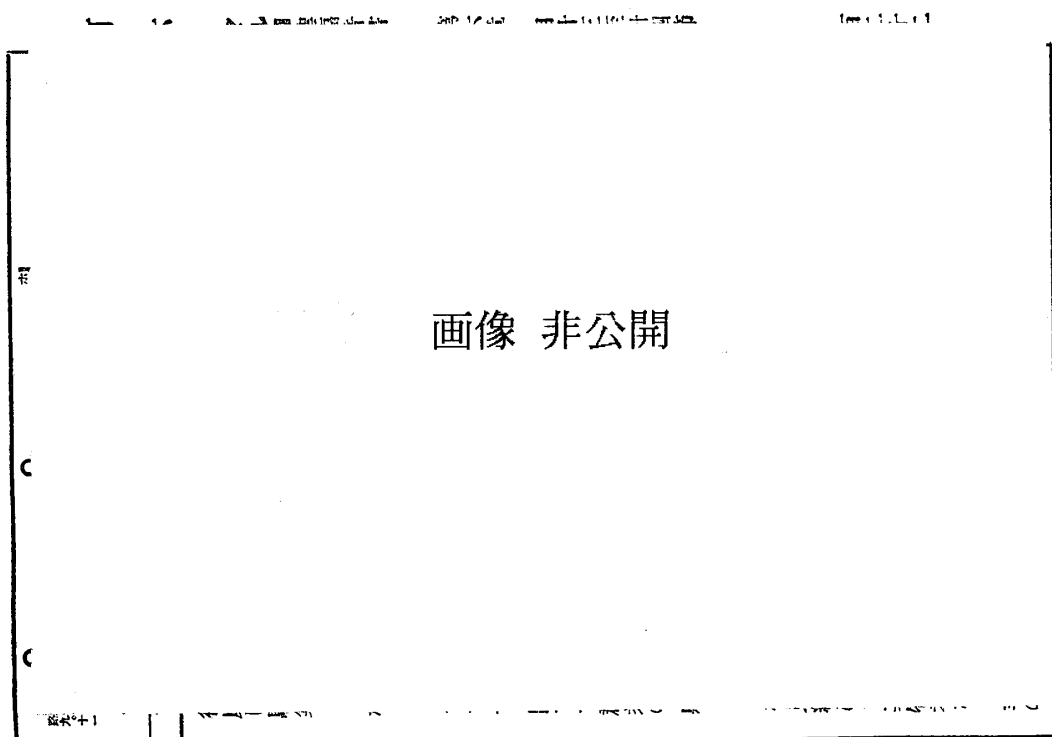
画像 非公開



画像 非公開



B. ラゲ訳



## C. 文 語 訳

画像 非公開

## 参 考 文 献

- 海老沢有道, 『日本の聖書・聖書和訳の歴史』, 東京, 1964  
Enkvist, N.E., Spencer, J. & Gregory, M.J., *Linguistics and Style*, London, 1964  
Firth, J.R., *Papers in Linguistics*, London, 1953  
倉長 真, 「聖書邦訳史」, 『日本の英学100年, 明治編』, 東京, 1968  
森岡健二, 『近代語の成立——明治期語彙編』, 東京, 1968  
〃 「旧約聖書の訳語」, 『東京女子大学創立五十周年記念論文集』, 東京, 1968  
Nida, E.A., *Toward a Science of Translating*, Leiden, 1964,  
Nida, E.A. & Taber, C.R., *The Theory and Practice of Translation*, Leiden, 1969  
*Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries in Japan*, Held at Osaka,  
1883.  
斎藤 勇: 「邦訳聖書の文体」, 『日本学士院紀要』 Vol. 25, No. 1  
豊田 実: 『日本英学史の研究』, 東京, 1963  
  
『キリスト教大事典』, 東京, 1963  
Hepburn, J.C., 山本秀煌共編 『聖書辞典』, 東京, 1926

- 『引照新約全書』，北英国聖書会社，1880
- 『新約全書』，米国聖書会社，1881
- Raguet, E. 訳，『我主イエズ、キリストの新約聖書』，公教会，1910
- 『聖書』（文語訳）日本聖書協会，1917
- 『聖書』（口語訳）日本聖書協会，1954
- Brown, N. 訳，『新約聖書』 *The New Testament in Vernacular Japanese*, Yokohama Bible Press
- Hepburn, J.C., 『馬可伝，新約聖書』，北英国聖書会社，1887
- The Holy Bible*, Authorised King James Version, 1611
- “ Revised Standard Version, New York, 1952
- Good News for Modern Man*, The New Testament in Today's English Version, New York, 1966
- （本学文理学部教授（英語学） 1974年度 個人研究員）